



The Japan Society of Archives Institutions Kinki District
Branch Bulletin
全史料協近畿部会会報デジタル版
No.96
2026.3.4 ONLINE ISSN 2433-3204

全史料協近畿部会第 177 回例会報告

2025 年（令和 7）10 月 20 日（日）

会場：プロム近鉄奈良駅前

テーマ：陣中日誌・軍事郵便など—戦争史資料の受け皿をめぐって—

佐藤明俊（奈良県立図書情報館）

「戦争資料の受け皿としての MLA：奈良県立図書情報館戦争体験文庫での体験から」

奈良県立図書情報館の戦争体験文庫（以下、文庫）が、戦争資料の“数少ない”受け皿と評されることがある（栗原俊雄「戦争史資料 国は散逸回避を」2024 年 10 月 5 日付毎日新聞等）。取材を受けた際、栗原氏に関東にも埼玉県平和資料館のような施設があるのでは？と申し上げた。が、栗原氏は文書類の受け皿になるような施設には見えなかった、と言う。

一般に博物館の資料閲覧スペースは入門書中心なことが多く、比較して文庫は自費出版の体験記等が開架に並んでおり、近代史の著作もある栗原氏に魅力的に映るのは理解できる。しかし、博物館はバックスペースでの活動を含めて見る必要がある。編纂事業と並んで歴史系の博物館が、近世文書保存に果たした役割は大きい。その延長線上に、多数ある戦争に特化した博物館的施設も、文書的な資料についても有力な受け皿になりうるのでは？、という思いが、本例会企画のそもそもの出発点である。

文庫は当初県福祉政策課が準備を担当し、前身館へ移管後、2005 年の図書情報館開館時にコーナーとして設置された。よく、なぜ奈良の図書館で戦争？と聞かれるが、これは福祉部局の平和祈念事業が博物館的施設ではなく、新図書館計画に結びついたためである。現在の活動としては、広い開架スペースを擁して閲覧提供すると同時に、資料分析して定期的な展示替を行い、新寄贈資料を整理している。

数多い平和博物館的施設でも、総合型とテーマ特化型に大別できる。総合型は近畿圏だとピースおお

さか・滋賀県立平和祈念館があり、吹田市や堺市も同種館を持つ。他全国にも存在する。広く 15 年戦争と銃後一般を扱うことが多いが、空襲経験をベースにする館も多く、空襲に特化した館に、岡山市や前橋市のものがある。

地域性からのテーマ特化型の館として、数多くの満蒙開拓団を送り出した長野県に満蒙開拓平和記念館があり、沖縄県にはひめゆり平和祈念資料館等がある。引揚に特化した形で舞鶴に引揚記念館がある。この館の収蔵資料はモノ資料も含め世界記憶遺産になったが、館の HP では資料の閲覧利用に一切触れていない。

航空、特に特攻に特化した館が特攻出撃地を中心に多く、代表的なものは、南九州市の知覧特攻平和会館だが、他にも枚挙にいとまない。軍港では呉市には大和ミュージアム等がある。なお、航空や軍港で取り上げた館を、山辺昌彦氏は「平和博物館」ではなく「戦争博物館」とする（『15 年戦争にみる平和博物館の経緯と課題』アテネ出版社、2024）。この問題は大きな論点となりうるが、ここでは深入りしない。

公共図書館は非常に普及しており、身近な市町村の図書館が、利用者から相談を受けて資料を引き取る、又はしかるべき他館につなぐことに期待している。が、実際には難しいのでは、と悲観している。というのは、図書館が保存機能を重視するのは有害とまで言い切った 1963 年の「中小レポート」（日図協小委員会『中小都市における公共図書館の運営』）が、いまだに公共図書館を呪縛していると感じているからである。

アーカイブズ各機能からみた文庫の現状としては、閲覧提供は行っているが、目録公開はできていない。目録公開をしている博物館的施設としては、立命館大学国際平和ミュージアムと広島県平和記念資料館がある。

岡村裕成（愛知・名古屋戦争に関する資料館学芸員、戦争と平和の資料館ピースあいち 嘱託学芸員）

「愛知県での公立・私立のアーカイブ（資料）活用の比較について」

	ピースあいち	戦争資料館
開館年月	2007 年 5 月	2015 年 7 月
建物について	名古屋市名東区 3 階建て	名古屋市中区 愛知県庁大津橋分室 1 階
運営に関して	民間ボランティアスタッフ 約 90 名が運営にかかわる	愛知県と名古屋市の共同で、常駐職員 2 名
展示構成	2 階と 1 階で常設展示 愛知県下の空襲、十五年戦争、命の壁、戦時下の暮らし、現代の戦争と平和 3 階で企画展示 名古屋空襲や沖縄展などの定期的なもの 原爆の図展やマンガ展などの外部団体の協力を得たもの	1 階に常設展示と企画展示が併設 常設では地域の戦争、県民の戦争体験 I（銃後）、県民の戦争体験 II（軍隊）、戦後の地域に加えて、戦時戦後の写真スライド、名古屋城焼失の再現映像、学童疎開の体験映像の上映

＜アーカイブ活用の共通項と差異＞

共通点としてまず、双方ともそれぞれの施設に持ち込みしての資料寄贈のみで対応している点が共通している。また、資料寄贈から資料登録、展示などの流れは本来の博物館での役割とそん色のない形で実施している。ただ、双方が連携する体制は皆無である点も共通している。例外的に戦争体験者の語りに関しては、戦争資料館からピースあいちに委託しているものの、日常的な連携には至っていない。

独自点として、ピースあいちでは嘱託の学芸員はいるが、主な資料の対応は先述したボランティアスタッフで結成された資料班と呼ばれるチームが実施している。2025年現在所蔵資料は7500点ほど、このうち一般で閲覧できるようにした台帳化した資料は4000点ほどだが、ここ数年分はピースあいち内では資料情報を見ることができないのが現状である。また、新規寄贈の資料であれば、年に一回実施される「寄贈品展」で展示されるものの、以降はピースあいちの企画展示にかかわりがない場合は陽の目を見ないこともある。そして、長年の市民運動から来るこだわりなどにより、新規での専門家の介入や資料関係の予算確保の困難さも抱えている。

一方で、戦争資料館では常駐の学芸員による対応であること、1990年代から資料寄贈の受付もあって、2025年現在約20000点の資料が収蔵されている。開館がとん挫をした時期には「インターネット資料館」の公開がされ、約200点の資料がネットで公開されている。所蔵している資料は3月、7月、11月で実施されている入れ替えや、名古屋市主催の巡回展示、自治体での貸し出しで活用できている上に、ピースあいちに比べれば上位互換になる、資料保存に関する予算の確保ができています。しかし、常駐の学芸員が有期雇用であることによる引継ぎの不十分さ、近年の物価高騰に伴った相対的な予算の減少、戦争資料館の展示室が狭いがゆえの展示活用の制約が目に見えて問題になっている。

＜官民の連携がない背景＞

1993年に愛知県と名古屋市で戦争資料館の建設をする計画が持ち上がり、民間の団体もそれに賛同した動きを見せる。しかし、財政難や土地の不確保など理由でとん挫、以降県と市では資料の寄贈や巡回展示、インターネットでの公開などでの動きが変わる。一方民間団体では特使化による寄付をきっかけにして自らの手で資料館を開館する方針になったことで、より戦争資料館とピースあいちでの連携の道を違えることになった。

羽田博昭（元横浜市史資料室調査研究員）

「横浜市史資料室における戦争関係資料」

横浜市における戦争関係資料は、横浜市史資料室と横浜都市発展記念館が所蔵する資料が中心となる。なかでも『横浜の空襲と戦災』（1975年～77年）編集時に収集した資料は、最も大きな資料群である。そのエッセンスは、資料集と位置づけられる1(体験記編)・2(市民生活編)・4(外国資料編)・5(接收・復興編)・6(世相編)各巻に収録されている。内容的には、とくに体験記・日記が注目される。

1977年の『横浜の空襲と戦災』刊行終了後、資料は当時の横浜市史編集室が引き継いだ。その後資料公開施設となった横浜市史資料室で、再整理を行ったが、年月が経過して経緯が不明な資料も散見されることが大きな課題である。再調査の過程では、ご家族から改めて日記の原本やアルバムなど原資料の提供も受けている。

空襲関連では、『中区史』編集時の資料中にも注目すべき資料として、「伊勢佐木警察署 変死者検視調書」がある。これは、当時の警察が記録した原票であり、死者数を集計する元となるべき書類であるが、他の警察署については今のところ確認されていない。中区史資料についても横浜市史資料室が所蔵している。

その他、横浜市史資料室が所蔵する諸家文書・個人資料中には、多くの戦争関係資料を見ることができ、安室吉弥家資料・高橋富美子家資料・田中一郎家資料には、他の家族の資料に混じって出征兵士の軍事郵便や関連資料が含まれている。

さらに、戦死した兵士の記録や、復員した兵士が残した書類や写真などを家族が大事に保管していて、それらを市史資料室に寄贈する場合もあった。そのいくつかを紹介する。日中戦争開戦直後に出征し、1ヶ月後に戦死した竹内進三さんの記録は、その間の従軍日誌を含め、出征から区民葬、慰霊まで一連の過程がわかる資料である。

また、小野道正さんは、北支従軍中に家族と交わした700通を超える軍事郵便をすべて残していた。戦地で受け取った家族などからの手紙は、失われることが多いので、貴重である。出征した兵士自身が記した手記が残されている場合もある。金子清さんは召集から、南方への船旅、戦後の捕虜生活の記録を記している。加山昇市さんは、ビルマに出征してからの戦場の実情を手記に残している。

以上のように、横浜市史資料室に所蔵されている戦争関係資料には、空襲被災者や、出征した兵士とその家族など、当事者の記録が多く残されている点が重要であると考えられる。